報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　尹東柱の脱神話化―トランスナショナルな視座からの再読―

氏　　名　姜　信和

論　文　内　容　の　要　旨

韓国の国民的詩人である尹東柱（旧満州・間島生まれ、1917－1945）は、韓国内のみならず極東アジア一帯のトランスナショナルな空間において、相互補完的に〈抵抗詩人〉という民族的なステレオタイプに祀り上げられがちである。ここでいう相互補完的な民族主義とは、たとえば日本と韓国を例に挙げると、両国の国境と民族を跨ぎ越す空間において、ありていに言えばそれぞれの国の左派と右派が、相互入れ子的に刺激しあい鼓舞しあうナショナリズムを意味する。つまり、隣国のナショナリズムが自国のナショナリズムを強化し正当化する構造となっているのであり、このことは比較歴史学の先行研究（林志弦）が指摘してきたとおりである。つまり民族主義的な想像力は、トランスナショナルな空間においてこそ、かき立てられると言えるだろう。

不幸なことに尹東柱は、〈民族〉をめぐるこのアポリアに嵌りこむ危険性をはらんでいる。具体的で易しい言葉で紡がれる詩と、それとはうらはらに植民地期の犠牲者として夭逝した非業の生涯とが重なり喚起される軋みと疼きは、人気の秘密であると同時に、もっぱら社会思想史的評価に尹東柱が回収される要因ともなってきた。本研究はそれらの解釈と受容傾向、および20世紀初頭の同時代的心象など、社会的相関性にも留意した上で、従来の過剰コンテクスト化（over-contextualization）の文脈とは異なった視座からテクストを再読し、尹東柱の脱神話化を図る。

考察方法について先に概略すると、まず民族的な〈抵抗詩人〉尹東柱の、その修辞には似つかわしくない「倦怠」という詩語を精読する。つぎに尹東柱の「倦怠」と表裏一体に扱われている詩語、「生活」についても吟味する。さらにそれらに随伴するまなざしについて、ことに詩作品「病院」などにその端緒が表出していることを根拠に、〈窃視〉の概念を援用し読解の拡張を試みる。

尹東柱の神話化された政治的イメージからか、これらのまなざしについても、〈抵抗詩人〉の崇敬すべき自己凝視などと称揚される傾向にあるが、抑圧的な社会情勢下における〈窃視〉は、社会相関的な男性性（masculinity）の欠如の表れであり、敢えていくぶんエロティックな詩人のまなざしを追いかける。そして最終的には、一見、後退的にみえる「倦怠」が、植民地の日常におけるままならない存在の証しとなっていることを確認する。尹東柱の〈窃視〉については、そのまなざしがエロティックであることにとどまらず、〈性〉を通して向こう側に透けてみえる〈死〉を察知し、沈潜する〈死の淵〉から逆照射された光と〈生命〉に焦がれていることを考察する。これらのテクスト分析により、等身大の詩人の様相に寄り添うことで、新たな尹東柱再読を試みる。

以下は章ごとの概説である。序章では、〈国語〉教育の現場で世襲的犠牲者意識（heriditary victimhood）を増幅させるテクストとして尹東柱を消費する韓国、かつての加害者としての漠然とした贖罪意識と無自覚な優越意識からそれらの韓国民族主義的な解釈をそのまま平行受容し、とどのつまりはその〈責任〉を曖昧にする日本、共産主義的イデオロギーも加味して尹東柱を再受容する出身地の中国東北部における様相など、それぞれの尹東柱受容の問題とそれに対するトランスナショナルな視座からの研究の方向を説明する。また、尹東柱研究がさかんな韓国の詩史的背景と研究史、および日本における論究を概略する。研究方法のキーワードは、「倦怠」と〈窃視〉である。

第二章では、「倦怠」の分析を展開する。引用のモザイクともいうべき尹東柱の作品には、数多くの詩人との間テクスト性が見受けられるが、同時期のアヴァンギャルドの詩人、李箱の吸収と変形もいくつか認められる。尹東柱がモダニズム詩人、鄭芝溶に親和することは理解されやすいが、意外であると断定されがちであるにもかかわらず、李箱の辛辣な皮肉と諧謔に満ちたジェスチャーに尹東柱が呼応していた事実は、一定の示唆を与えてくれる。尹東柱は、植民地支配に対する抵抗戦線の聖地ともいわれる間島において、名家の長男としての葛藤を抱いていた。民衆神学としてのキリスト教を基調に、男性中心主義的な家風のなか、進路をめぐって父との葛藤があり、祖父には嘆息し、疎外感を舐めざるを得なかった。そうした詩人の詩語、「倦怠」には、家父長制のなかの民族主義的談論と宗主国介在の帝国的なモダニティとの狭間で宙吊りにされた、尹東柱のアンビヴァレントな姿が垣間みられる。そしてこれらの姿は決して例外的なものではなく、むしろ植民地期〈インテリ〉の類型ともいえるものであった。具体的には、李箱の詩作品である「こんな詩」の題目をもじった尹東柱の詩、「こんな日」を糸口にする。「もの憂い倦怠」という日本語の既存訳も介在させながら、原語の「澄みわたった倦怠」と「乾いた学課」という詩句を掘り下げる。五族協和の「矛盾」と「倦怠」の実相を、当時の社会背景や教育カリキュラムも参考に紐解いていく。その他、尹東柱作品に登場する詩語、「倦怠」はすべてこの章で考察する。

第三章では、「倦怠」が「生活」という詩語と表裏一体であることから、内なる「倦怠」を引き受けようと見つめ続ける尹東柱のまなざしが、日常にありふれている「生活」への飽くなき観察と重なりあっていることにも着目し、それらを生活に密着した日常的植民性（everyday coloniality）の諸相として考察する可能性を模索する。尹東柱は老人、若者、こどもといわず、誰もがみな「包み」を抱えもっていると言い、それは「生活の包み」であり、同時に「倦怠の包み」なのかもしれないと語った。尹東柱においてこれらの「包み」は、ありふれた〈生〉を普通に生き抜くことの厄介さの包みとなっているが、このように「生活」という詩語もすべて拾い上げ、そちらの側からも「倦怠」について分析を試みる。その上で「倦怠」という詩語こそは出てこないが、ツルゲーネフのパロディーである詩作品、「乞食」に描出された「生活」を追い、それを観察する余計者の、「倦怠」に満ちた様相について考察する。このツルゲーネフと尹東柱との間テクスト性は、帝政ロシア社会の矛盾を結果的に暴いた〈ツルゲーネフの窃視〉（乗松亨平）の援用の可能性を暗示するものである。

第四章では、尹東柱の「倦怠」や「生活」に随伴するまなざしについて、〈窃視〉の概念を援用し読解を試みる。先のツルゲーネフとの間テクスト性にヒントを得て、当時の「生理学的スケッチ（физиологические очерки）」の流行との相関性、科学ブームの実証の時代らしい同時代的風潮、クラフト・エビングの翻訳を発端とする日本の性ブームとともに、〈窃視〉のもつ臨床上のスペクトラムの広さも射程に入れ、改めて〈窃視〉を性的なものに限定しようとしてきた固定観念を問い直し、その潜在的な可能性について検証する。詩作品、「病院」における女の白い脚への〈窃視〉は多義性をはらんでおり、〈性〉を通して、その向こう側に〈死〉を見ていることを、関連する作品を順に追いながら論証していく。〈性〉へのありのままの〈窃視〉は、〈死の淵〉を覗き見ることと等価的な行為である。しかし、すべての死にゆく者の〈性〉へのまなざしは〈死の淵〉に見入る一方で、両義的に、死に向かわざるを得ない限りある〈生命〉を覗き込んでいることを確認する。つぎに〈性〉と〈死〉のイメージに密接に絡む〈白い〉モティーフを網羅し、光に透けて見える〈白〉の表象が、不気味に〈死〉に相関するメタファーであり、〈死〉を暗喩する心象比喩（imagery）となっていることを紐解いていく。そして〈死の淵〉にまで沈潜したまなざしが、〈死〉と否応なく対比するはかない〈生命〉の観察へと遡行し、あくまで結果的に、日常の無為性と時代の猛威を告発していることを解明する。

以上のように、一般的にはいくぶん後退的な含意と捉えられがちな「倦怠」、「生活」、〈窃視〉というキーを軸に、逆照射された考察を基底として尹東柱の〈抵抗詩人〉言説の諸問題を再検証する。言及するまでもなく、本研究は植民地期の犠牲者というテクスト外的な情報に過度に依拠しがちになる評価への疑問から始まったが、これを根本的に否定しようというものではない。文学研究が当然、担わなければならない歴史認識の考察に尽力した先行研究の成果を

継承し、尹東柱の周辺性に配慮しつつも、文学的評価の普遍的な地平を開くことを目的とする。この相矛盾するかのような尹東柱の特殊性と普遍性の適切な究明は、先述した極東アジアにおける相互補完的な民族主義に嵌り込むことへの拒否であり、かつての宗主国としての責任ある尹東柱受容のためにも必須の、今日的な課題である。